令和８年５月２９日
京都府中丹東農業改良普及センター
京都府中丹西農業改良普及センター

大雨による浸水・冠水対策情報

５月２７日に発生した台風６号は５月３０日（土）から６月２日（火）にかけて北上し、沖縄地方に接近する予想です。西日本でも前線の活動が活発化して大雨が降る可能性があります。今後２か月近くは梅雨の時期となることから、以下の事項を参考に十分な大雨対策を講じてください。

１ 水　稲

水稲は冠水時間が長くなるほど減収率が高くなります。水が引き次第、状況に応じた対応をしてください。

(1) 浸水、冠水したほ場

①水が引き次第、水路やほ場の泥やゴミ等を取り除く。

②分げつ期の浸・冠水は黄化萎縮病の発生を著しく助長するため、水が引いた後も水稲の様子を観察し、発病が認められたら直ちに防除を行う。

２ 小　麦

収穫直前となっており、成熟期を迎えたら速やかに収穫する必要があります。遅滞なく収穫するために、降雨後は速やかにほ場が乾くよう対策を講じてください。

①水が引き次第、水路やほ場の泥やゴミ等を取り除くとともに、明きょや水尻の点検・修繕を行い、滞りなく排水されるよう努める。

３ 豆　類（「紫ずきん」・「京 夏ずきん」を含む）

豆類は一般的に湿害に弱く、浸・冠水時間及び滞水時間が長くなると減収率も高くなるので、水が引き次第、速やかにうね間の排水を促し滞水時間を短くしてください。

また、病害が発生しやすくなるので、必ず予防防除を行ってください。

(1) 浸水、冠水したほ場

①水が引き次第、水路やほ場の泥やゴミ等を取り除くとともに、うね間に滞水しないよう排水を促し、ほ場の乾燥に努める。

②浸冠水すると病害虫が発生しやすくなるので、直ちに予防防除を行う。
茎葉に付着した泥を落とすように防除する。

③土壌が乾いた後、浅く耕し、通気性を確保する。

④雑草が多発する場合があるので、雑草の発生状況を確認し、必要に応じて除草剤の散布を行う。

４ 野菜、花き

冠水したほ場では、土壌中の酸素が欠乏するため、根の呼吸が阻害され、根腐れ、茎葉の萎凋など、さまざまな症状が発生します。以下の点に注意し、速やかに必要な対策を行ってください。

(1) 浸水、冠水したほ場

①マルチ栽培では、マルチをめくり土壌表面の乾燥を促す。

②退水後は直ちにほ場を清掃し、土が乾いた後、根を傷めないように浅く耕し通気性を確保する。また、排水溝を深めに整備し排水に努める。

③茎葉に泥の付着が多い場合、清浄な水や殺菌剤の散布により速やかに洗い流し、光合成の低下や病害の発生を防ぐ。

④冠水によって土壌中の窒素や加里が流亡し、葉色が薄くなり生育が緩慢になることが心配される。「根腐れ」や「しおれ」がないことを確認した後、追肥として窒素と加里を含む速効性の肥料を施用して、樹勢の回復を図る。

施用方法は、１アール当たり窒素成分で０.１～０.２kgを 5 日間隔で２～３回程度、土壌表面または通路に施用する。

⑤果菜類では、樹勢の低下が見られる場合は、摘果と若穫りにより着果負担を軽減し、樹勢の回復を図る。また、トマトやトウガラシ類では、カルシウム欠乏による尻腐れ果の発生が心配されるため、カルシウム剤の葉面散布を 5 日間隔で２～３回程度行う。

⑥風雨による茎葉の傷からバクテリアや糸状菌が侵入し、病害が発生する恐れがあるので、殺菌剤の予防散布を行うとともに、こまめに観察し、発生初期から防除を行う。特に、疫病、軟腐病などの土壌病害の発生が多いので注意する。

⑦収穫可能なものは速やかに収穫する。また、播種直後で発芽不良の場合は、直ちに播き直しを行う。

⑧ハウス栽培で冠水した場合には、速やかに排水に努めるとともに、強光でハウス内が高温になる場合は、遮光により昇温を抑制し、草勢の回復を図る。

５ 果　樹

①浸水したほ場は、速やかな排水に努める。

②ブドウではべと病、ナシでは黒星病や黒斑病、モモではせん孔細菌病、カキでは炭疽病等の発生が予想されるので、適用のある農薬を確認して殺菌剤を散布する。

６ 茶

(1) 茶園管理

①浸水した茶園は、速やかに排水を図るとともに漂着物を除去する。

②激しい降雨で株元が不安定になった幼木園では土寄せを行い、地際部や根を保護するために敷草等を行う。

③病害が発生しやすいので、適用のある農薬を確認し、治療効果のある薬剤による防除を徹底する。